資料紹介　莆仙戯　『目連救母』

訳　廣　田　律　子

中国で伝承されている地獄巡りの話の中で、民衆に広く知られているのはやはり『目連救母』の話であろう。目連の地獄巡りは古くから唱われ、唐中期、八世紀半ばに盛んに仏事に際して絵解きをしながら唱われたとされる、変文にも『目連変文』が存在する（注１）。変文は明・清代に宝巻に受け継がれ（注２）、現代の目連劇に至る。この目連の地獄巡りは、その他の地獄巡りの話や芸能に多大な影響を与えている。

現在、福建省に伝承されている、代表的な目連劇を取り上げ翻訳することは、地獄巡りの内容を比較する際に有用であると考える。

テキストとしては、劉禎校訂『莆仙戯　目連救母』（財団法人施合鄭民俗文化基金会・民俗曲芸叢書 1994 年）を使用する。今回は地獄巡りの段である、第三夜下本の一幕から六幕途中までの翻訳を行う。

（注１）王重民編『敦煌変文集』人民文学出版社　一九五九年

（注２）『目連三世宝巻』宣統元年　蘇城瑪瑙経房刊本等

第一幕　第一殿で審問、押送される

（蕭明王登場、鬼卒一緒に登場）（蕭明王歌う）冥土のありとあらゆるさまは立派なものだ。第一殿を司る職を疏かにすることはできようか。我は二つの地獄を司り、両側に剣の樹と刀の山の並ぶところにいる。

（台詞）我は秦広蕭明王である。第一と第二の地獄を司っている。左の方は刀の山と言い、右の方は剣の樹と言う。世間で悪事を働いた人は、死ぬとすべてこの地獄の苦しみを受ける。鬼卒、札をかけておけ。

（鬼卒の台詞）は～い。

（札を掛ける）一つは自分の夫を謀殺した事件で、罪人の婦人は李丁香である。一つは他人の財産を奪おうとたくらんで殺害した事件で、罪人は孫丙である。も

う一つは誓いに背いて精進落しをした事件で、罪人の婦人は劉四真である。

（蕭明王の台詞）孫丙、上がって来い。（孫丙登場）

（蕭明王の台詞）おい、孫丙、お前は他人の財産を奪おうと人を謀殺した。なんと心のむごい奴だ。有体に白状せよ。

（孫丙の台詞）殿さま、小人は本当にそんな事をしておりません。実は、あの日は出かけて、一人の金持ちと宿屋で一緒に宿泊しました。私は彼の開けた財布にたくさんの銀があるのを見たので、彼から少し金を借りたかったのですが、彼に断られました。翌朝起きてから、私はひそかに彼の後について、山の奥に到ると、まわりに誰もいない隙を見て彼の後頭部に向かって石を投げました。案外に彼は弱くて、直ちに地面に倒れて死んでしまいました。実は誤殺で、謀殺ではありません。

（蕭明王の台詞）ここに来た以上、まだ強情を張るのか。殴ってやれ。

（鬼卒の台詞）殴ってやる。（殴る）

（蕭明王の台詞）李丁香、上がって来い。（李丁香登場）

（蕭明王の台詞）お前は姦通をし、自分の夫を謀殺した。何の罪に当るべきか。

（李丁香の台詞）殿様、私の夫は気違いになったので、お金をかせいで私を養うことができなくなりました。隣の叔さんは私を哀れに思って度々救済してくれました。私はすまないと思って、彼とひそかにつき合うようになりました。一包みの鼠薬を食物に入れて鼠を毒殺しようと思って家に買っておきましたが、あいにく私の夫が誤まってそれを食べて死んでしまいました。実は姦通はしましたが、夫を謀殺したことはありません。

（蕭明王の台詞）鬼卒、彼女の背を殴ってやれ。

（鬼卒の台詞）殴ってやる。殴ってやる。（殴る）

（蕭明王の台詞）劉氏、上がって来い。（劉氏上登場）

（蕭明王の台詞）おい、劉氏、お前は誓いに背いて、精進落しをするために家畜を殺してその命を奪った。何の罪に当るべきか。

（劉氏歌う）平伏して殿さまに訴えさせていただくように願います。私を無罪に赦免なさるを乞います。私は生前に孤兒ややもめを哀れみ助け、急な用のある人や貧乏な人を救済し、危険にさらされた者や苦しんでいる者を助けました。確かに精進落としをして、家畜を殺すことをしました。これは食べたいためであり

ましたが、婦女の浅薄な考えで、一時の過ちでありました。平伏して、殿さまに恩恵を施して活路を開いて下さるように願います。

（蕭明王の台詞）劉氏は家畜を殺して精進落としをしたことで誓いに背いた。もとより、この罪で処罰されるべきだが、傅という一家が精進をし、三代も善をなしたために、刑を赦免してやる。鬼卒、劉氏を次の殿に押送して行け。（鬼卒は劉氏を押送して退場。鬼卒は、孫丙、李丁香に長い首枷をはめて、第五殿に押送する。）

（蕭明王の台詞）半分は法を慎み、半分はゆるすべき事情があるから、劉氏をまず極めて重い刑罰から免赦してやろう。（退場）（目連登場）

（目連歌う）やって来た。地獄に来て涙がほろほろこぼれ、こぼれている。刀の山や剣の樹が両側に並んである。哀れ、哀れかな、私の母はこの内に落ちて、この内で、責め苛まれて、いろいろの苦しみをなめている。（敲く）六つの輪のつけた錫の杖で敲くと、地獄の扉が自ら開いた。亡者は嬉しくなるであろう。合掌して如来仏に礼拝する。南無偈諦般若菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜。（圓場）

（鬼卒登場）（鬼卒の台詞）あなたはどこのお坊さんか．どうして勝手に地獄の扉を開いたか。

（目連の台詞）拙僧は西方の目連である。母の劉四真をさがすために来た。ご面倒をかけるが、長官に案内して頂きたい。

（鬼卒の台詞）おや、劉四真はお母さんか。今朝に審問され、もう次の殿へ押送された。禅僧さんがさがしたいなら、次の殿に行く方がよい。どうぞ。（退場）

（目連歌う）意外にも、お母さんは次の殿に押送された。せっかく来たのに、あいにく会えない。ぐずぐずせず、まずまっすぐに次の殿に行こう。（退場）

（獄官登場）（獄官歌う）世間の人は冥土が遠いものだというが、地獄に来てみると、空しく悲しみうらむと誰が知ろうか。神の目は光のように明るい。世間で悪事を働けば、刑罰を免れられない。

（台詞）我は宋殿下司獄である。刑罰を司って、真面目で務めを疎かにしない。左に鉄のベッドがあり、右に血の湖がある。鉄のベッドでは罪人の肉や骨をあぶり、血の湖にはその死骸を浸す。世間の人に悪事を働かないように勧め、水と火は無情なものだと知るべきだ。鬼卒、罪人を全部押送して来い。（鬼卒は罪人の劉氏等を押送して登場）

（獄官の台詞）おい、悪い婦人、お前らは生きていた間に、血水で日、月、星の三光を汚したことがある。何の罪に処罰されるべきか。

（罪人の婦人歌う）婦人は無実の罪を受けています。お産の時に血の水を流しただけのことで、誰が知りましょうか、冥土で咎められるとは。殿さまには手加減して頂き、済度して下さいますように。

（獄官の台詞）多くしゃべるには及ばない。これらの罪人を皆さすまたでついて血の湖に投げてやれ。（鬼卒は罪人の婦女を押送して退場）劉氏を押送して来い。劉氏、お前は誓いに背いて精進落としをし、血の水で三光を汚した。何の罪に当るべきか。

（劉氏の台詞）はい、殿さま、誓いに背いて精進落としをしたのは私の過ちでありました。血の水で三光を汚したのは婦女として止むを得ないことです。どうぞ手加減して頂き、済度して下さいますように。

（獄官の台詞）婦女には止むを得ないことでも、止むことができるのに止まなかったから、これも罪に処されるべきだ。鬼卒、さすまたでついて血の湖に投げてやれ。

（劉氏の台詞）殿さま、しばらく寛忍して下さい。私がはっきり訴えさせて頂いた上で、刑罰を受けるように願います。

（獄官の台詞）まあ、よかろう。しばらくお前を容赦してやる。もし、訴えることが理にかなうなら、お前の刑罰を容赦してやる。鬼卒、劉氏をさすまたでついて血の湖の浅いところに置いて、彼女に訴えさせよう。

（劉氏歌う）婦人の身に生まれてはいけない。婦人になれば苦しみをなめるだけだ。子のないうちに、毎日子を欲しがって、毎日欲しがって、妊娠したかどうかよく分からない。一か月の胎児は露の水のようで、露の水、二か月の胎児は桃の花の形になる。三か月の胎児は筋骨が成長し、筋骨。四か月の胎児は形貌がととのう。五か月の胎児は男女が区別され、男女。六か月の胎児は髪の毛が生える。七か月の胎児は左手が動く。八か月の胎児は右手を伸ばす。九か月の胎児は三回廻る、三回廻る。十か月の胎児は子になる。腹が痛くなって分娩の日に、冷汗が水のように流れるほど痛む。汚れた着物を洗うと、血の水が地面に満ち、地面に満ちる。産んだ男の子は千金の価値がある。三日か五日立つと乳が足りない、乳が足りない。乳母を雇うのは難しい。一日に母の乳を十回飲んで、十回の乳。十

日間で百回以上になる。子を包んだ着物が糞で汚れ、糞で汚れたら、随時きれいに洗う。昼間の苦しみを忍んだら、夜の苦しみはいっそうひどくなる。子がよく眠る時に、母は眠れない。眠れない。子が良く眠ったかを心配するからだ。左側が湿ったら母がそこで寝て、そこで寝る。右側の乾いた処に子を置く。もし両方ともびっしより湿ったら、びっしより湿ったら、夜あけまで子を腹の上に寝かしておく。これは三年の授乳の苦しみ、三年の苦しみだ。子を持って知る父母の恩。千万の苦しみは言い尽せず、尽せず。人としては婦人の身に生まれてはいけない。

（獄官歌う）子を養うのがこんなに苦しいことと聞けば、感激する。感激して心が動かされた。父母の恩は重い。息子としては孝行の心を持たなければならない。

（劉氏歌う）平伏して願います。恩官は哀れに思召し、戝しい私の罪名を容赦して、二つの地獄の刑罰を赦免して下さい。

（獄官の台詞）訴えたことには道理がある。刑罰を赦免してやろう。鬼卒、劉氏を次の殿に押送して行け。

（劉氏の台詞）どうして私を何回も押送していくか。

（獄官の台詞）お前は現世で冥土の法制を信じなかったので、お前に知らせたいのだ。安心して行ってよい。お前の息子がお前をさがしに来れば、自ら済度される日が来る。二つの地獄の刑罰を容赦してやる。

（劉氏の台詞）恩官が哀れんで下さることに感謝申上げます。千年万年も埃の立たないように心をきれいに致します。（鬼卒は劉氏を押送して退場）（目連登場）

（目連歌う）母のために色々の苦しみをなめて、何つもの地獄に来てさがす。息子が一つの殿に到れば、母はすでに押送されていて、同じ道をたどった。いつ済度できるかはわからない。血の湖に来て、よく調べよう。

（獄官の台詞）禅僧は何の用でここに来たのか。

（目連の台詞）拙僧は西方の目連である。母の劉四真をさがすためにここに来て、お邪魔をする。

（獄官の台詞）まさか劉四真はお母さんなのか。小官は先ほど彼女を審問し、特別に刑罰を赦免して、次の殿へ押送した。

（目連の台詞）お世話になってありがたい。

（歌う）可哀相に、母はもう年寄りで、どうして各殿でいじめられることに堪

えられようか。仏様に、哀れに思召し、罪を容赦して下さるように願おう。

（台詞）ここに血の湖があると聞いたが、拙僧をご案内頂きたい。

（獄官の台詞）願いの通りにしよう。（一緒に退場、更に登場）（鬼卒は罪人たちを押送して登場）

（目連歌う）ここに来て、ここに来て涙がほろほろと流れる。人間として、人間としては婦人の身になるなかれ。分娩の時に非常に苦しみ、さらに血の湖で苦しみを受ける。

（台詞）獄主におたずね申したいが、血の湖の中で、多くの婦人は非常に苦しんでいるが、男はこの罰を受けるのか。

（獄官の台詞）夫は関係ない。婦人は分娩の時に、血の水が神を汚し、さらに汚れた着物を川で洗濯するから、善男善女はこういう事を知らず、誤まって川の水で入れたお茶を諸聖人に供えることになる。命の終わる時になると、このような苦しい応報を受けることになるのだ。

（目連の台詞）先ほど母がここに来て、やはりこの苦しい応報を受けたのか。

（獄官の台詞）小官は彼女の訴えには道理があるので、だた湖の浅い処でしばらく立たせたが、大変な苦しみを受けさせることはなかった。

（目連歌う）ここに来て、ただ天に叫ぶだけだ。幸いにも、幸いにも、母は分娩、授乳して子を養育した。ああ、母は苦しかっただろう。この血の湖を見れば、その広さは８万４千余ある。あの看守は無情に罪人を拷問している。息子として恩返しできない。ああ、どうして人間として生きられようか。あの血の湖にいる人々がしきりに悲鳴をあげ、涙をほろほろ流しているのを見ると、鋼鉄のような好漢でもここに来れば悲しくなる。仏さまの大慈悲で、この婦人たちが早く冥土から解脱できるように、その苦しい罰を容赦して下さい。

（獄官歌う）禅僧さんの孝行は本当に無類だ。天上から冥土まで、いつもお母さんのことを心にかけている。婦人が仏や経文を信じなかったため、血の湖に来てしまった。

（目連の台詞）獄官さまにお聞きしたいが、母の養育の恩に報いるには、どうすればよいのか。

（獄官の台詞）世の中の善男善女は、三年十か月の間血盆の精進をよくすれば、解賽盆の中から五つの蓮の花が出現し、さらに般若船が彼らを奈彼岸まで渡し、

罪人を済度してやることができる。

（目連の台詞）世間の人たちはあくせくしていて、誰が改心できようか。拙僧は、母を救って昇天させる日に、南閻浮提に教えを乞い、善男善女に早く覚悟してうやうやしく血盆の精進潔斎をするように勧めよう。

（歌う）母を冥土から救い出し、必ず南閻浮提に教えを請うために、早速旅立つ。

（獄官歌う）感服すべきだ、感服すべきだ。大慈大孝、万古まで誉められよう。

（目連の台詞）獄主にお聞きしたいが、血の湖の内に大勢の罪人がいる。拙僧は彼らを再び人間の身として生まれ変わらせたいが、獄主の慈悲で便宜を与えて下さい。

（獄官の台詞）彼らは生前に禅僧と縁があるから、今日ようやく苦しみから解脱できよう。

（目連の台詞）仏さまに感謝する。弟子はこの大勢の罪人を済度したいので、仏さま引導して下さい。罪人は生きていた間に修行しなかったので、ここに至った。今私は助けたい。私の言うことを聞くべきだ。すべての婦人は、舅姑に孝行し、夫に従い、兄嫁と弟嫁に親切にし、奴僕を家の者のように見なし、専心して善に向かわなければならない。そうしないと、永遠に生まれかわることができない。

（大勢の罪人の台詞）禅僧さんのご好意に感謝する。私達は深く感謝する。

（目連歌う）種々な悪事をせず、よく慎まなければならない。すべての善事を真心で行うべきだ。皆は早く貪欲を断って、輪廻に入って人間の身に生まれ変わることができよう。

（台詞）阿弥陀仏、阿弥陀仏。

（歌う）私は今彼らを血の湖の苦しみから解脱させて、再三わけを説く。舅姑に孝行し、主人を敬うべきだ。主人。再び人間の身を失えば、苦しみはもっと深くなる。

（台詞）阿弥陀仏、阿弥陀仏。

（歌う）血の湖は蓮池の水となる。蓮池の水に五つの蓮の花が現れてくる。仏さまの法力に頼って生死を超越する。生死。よく修行して、でたらめな事をすることなかれ。（衆は退場）

（台詞）阿弥陀仏、阿弥陀仏。あーあ、苦しい。

（獄官の台詞）禅僧さんは今日大勢の罪人を救ってやった。よいことをして、どうして涙を流しているか。

（目連の台詞）拙僧は大勢の人を済度したが、母を解脱させることができず、涙を流さずにはおられない。

（獄官の台詞）これは天上からの勅旨による。禅僧が息子として一つの殿を通れば、お母さんが一つの殿に押送され、息子が一つの関を通れば、お母さんが一つの関に押送される。

（目連の台詞）なるほど。

（獄官の台詞）そうだ。大慈大孝を行って仏教を読経する。

（目連の台詞）何時私の母を済度できようか。

（獄官の台詞）どうぞ。（一緒に退場）

第二幕　五殿の合同審判

（四王、六王登場）（六王歌う）下に冥土があり、上に天がある。頭を上げて仰ぎ見れば、法は無辺なものだ。

（六王歌う）有罪か、無罪かを知るのは、その人間が賢いか、賢くないかによるだけだ。

（四王の台詞）今日は勅命を奉じて、第五殿の閻魔王と合同審判をする。法により判決すべきで、私情にとらわれて軽々しく悪い罪人を赦免してはいけない。

（六王の台詞）世間に善をなすものは少なく、悪事を働くものは多い。当然法により、ひどくこらしめてやることでこそ、冥土の応報には誤りのないことを現すことができる。

（舞台内の台詞）報告致す。第五殿の閻魔王さまがお見えになった。

（四王、六王の台詞）どうぞ。（五王登場）

（五王歌う）天上から職を授けられて霊威を顕わし、冥土の神々に尊敬されている。良いことをすれば、いつかは良い報いがあり、悪いことをすれば、いつかは悪い報いがあるものだ。業鏡台の上にはっきり映しだされている。

（四王、六王の台詞）閻魔王さまのご出座を迎えずに、お許しを乞う。

（五王の台詞）どう致しまして。今日は天上から勅命を奉じて、皆さんと一緒に悪い罪人を審判するように命じられた。すべて世間で悪事を働いたものを冥土の律でひどくこらしめて、私情にとらわれてはいけない。

（四王、六王の台詞）天上より勅命を奉じて、どうして私情にとらわれることができようか。出廷の札を掛けておけ。（鬼卒は罪人達を押送して登場）

（鬼卒の台詞）一つは、富を築くためにずるいことばかりした傅天暄のことだ。

（四王、五王、六王の台詞）傅天暄、上がって来い。おい、傅天暄、お前は富を築くのにずるいことばかりをし、禁令に違反して利を求め、人に財産を蕩尽させた。軽い秤で出し、重い秤で入れ、小さな斗で出し、大きな斗で入れた。お前の貪欲さは虎や狼のようで、心は蛇や蝎のようだ。何の罪に当るべきか。

（傅天暄の台詞）殿さま、小人は本当にこのようなことはなかったのです。

（歌う）平素利を取るには公平にした。軽重、大小の異なる秤を使うことはなかった。

（四王、五王、六王の台詞）鬼卒、傅天暄を業鏡台に押送して映させ、調べて来い。

（歌う）業鏡には、はっきり映って、はたして富を築くのにずるいことばかりをしていた。

（四王、六王の台詞）閻魔君に伺いたいが、どのようなに処理すればよかろうか。

（五王の台詞）鉄錐の苦しみを受けるべきだ。

（四王、六王の台詞）そうだ、鬼卒、傅天暄を鉄錐の極刑の苦しみを受けるところへ押送して行け。（押送して退場）

（鬼卒の台詞）もう一つは父母を殴ったり、罵ったりした罪人、趙甲のことだ。

（四王、六王の台詞）趙甲上がつて来い。おい、趙甲、人間は天地の間に生きている限り、父母を尊敬すべきだ。お前はなぜ父母に逆らい、親不孝な者になって、父母を殴ったり、罵ったりしたのか。

（趙甲の台詞）おや、殿さまよ、小人は親不孝なことなどなかったのです。ただ平素賭博が好きだから、私はよく親に責められた。一言、二言なら、小人も我慢できるが、親はどなったり、罵ったりして止まない。小人は乱暴にならずには

おれなかった。親がよけいなことに口を出したのだから、小人の騒いだことを咎めないようにお願いする。

（四王、六王の台詞）この逆らう者は、逆らった理屈を言っている。閻魔君にお伺いしたいが、どのようなに始末しようか。

（五王の台詞）このような悪逆非道の罪人は油鍋の苦しみを受けるべきだ。

（四王、六王の台詞）鬼卒、趙甲を油鍋のところに押送して苦しみを受けさせろ。（趙甲を押送して退場）

（鬼卒の台詞）もう一つは誓いに背いて精進落としをした女囚の劉四真のことだ。

（五王の台詞）劉四真上がって来い。おい、劉四真、お前は自業自得で、地獄の苦しみを受けるべきだ。更に何か言いたいことがあるのか。

（劉氏歌う）お許しを乞います、訴えさせていただきたい。私のことをお考えになって、私が生前に善心を持っていたことをお考え下さい。殿さま、不憫に思って下さい。かつて三宝につかえました。かつて神明を敬いました。殿さまよ不憫に思って下さい。かつて精進や布施を行いました。かつて貧民を救済しました。殿さまよ不憫に思って下さい。殿さま、殿さまのご諒察を乞います。済度、私のような老婆を済度して下さい。

（五王の台詞）おい、劉氏、お前の夫は善行を積んで天上に昇った。お前の息子は修行して得道した。独りお前は悪性が変わらず、罪つくりをした。修行したのはお前、修行をやめたのもお前、以前誓いを立てたのはお前、今日幾重の地獄で苦しみを受けるのもお前だ。

（劉氏の台詞）殿さまがこの老婆の夫と息子のことを言及なさらないなら、もうそれでいいのですが、私の夫と息子のことをご存じである以上、私も仏さまの言われることを聞いたのです。一人の息子が得道すれば、九族も天上に昇れます。夫婦、母子、すべて五倫の近親に属し、そのお陰でお赦し頂けないでしょうか。

（五王の台詞）甚だずるい言いわけをする。瞽災叟の殺人に対して、皐陶は舜のために法を曲げることができなかった。明らかにお前は夫と息子の善行にもかかわらず、敢えて誓いに背いて精進落としをした。もしお前が誓いの通りにしなければ、それは法律を知らないことになる。地獄の罪はどうしても赦免できないものだ。

（劉氏の台詞）殿さま、私自身の功過も相匹敵できるでありましょう。

（五王の台詞）いや、小善は大罪に相匹敵できない。応報を明らかにしないでいいものか。

（劉氏の台詞）済度させて、容赦を賜るように乞います。

（五王の台詞）劉氏よ、強情に言いはってはいけない。言いはっては。

（劉氏歌う）私は頭を低く下げておとなくし、服従しないのではないのです。おとなしく服従します。私は敢えて強情に言いはって、分別しないのでもないのです。

（台詞）冥土では閻魔天子だけが尊いと私は聞いたことがある。今日ここに来て、どうして公平に処理して頂けないのだろうか。

（歌う）可哀相に、私は死後に永遠に生まれ変わることができない。平生を顧みれば、妻として夫の賢明さを助け、夫の賢明さ。母として息子の善行をなしとげさせた。山や海のように、高く且深いものだ。

（五王の台詞）善行を高く積んでも、この心を固く持つことはできなかった。いつも仏経を読経するものでも、口を噤むと、強盗になる者があり、毎日刀を持って屠殺する者でも、刀を捨てれば、悟りの境地に進む者もあることを聞いたことはないか。

（劉氏の台詞）殿さまのおっしやるようならば、私は一生善を積んできても、一時破戒したために、かえって代々悪事を働いたが、一旦改心する者に及ばないのでしょうか。

（歌う）善行をなすべきだが、庇を求められる。庇を求められる。悪事を働いてはいけないが、かえって庇われる。これはまさに善悪の応報はさかさまにされて頼りがない。私は自己を讃ずるのではなく、自分のことをごまかすのでもない。物は平らかならざればすなわち鳴る。今ただ業鏡にはっきり映ることを望む。

（台詞）私はこんなことを聞いた。聖人の経には、聖人は間違いをすることを許さないが、人の改心することを許すという。

（歌）今はただ高くかかげられている業鏡が私の心を映し、私の心。肝胆を映して私の罪を赦免し、夫と息子について過ちを改めて気分一新させることを望む。

（五王の台詞）おい、劉氏、こういうことを聞いたことはないか。上帝は北方の玄武の精でありながら、なお九世の修行を経験すればこそ、本当の悟りを得ら

れた。呂洞賓は低い仙人であっても、十世の災難を経験したから、功を完成した。まして、お前の前身は聖母で、代々焼香し、悪人の類ではなく、賤しい人の類でもない。一旦食わんがため、多くの功を失い、自ら罪に落ち入った。何の怨みがあろうか。何の怨みがあろうか。

（劉氏の台詞）公正無私のことは法と言われ、殺生を好まないことは徳と言われるでしょう。殿さまは公正無私の法を司る以上、さらに殺生を好まない心を体現なさるでありましょう。

（五王の台詞）上帝はもとから殺生を好まない。それでも秋の死刑を廃さない。私は天罰の命を奉じて施行するのみ。

（劉氏の台詞）ああ、神さまよ、劉氏は生前によいことをたくさん行ったのに、どうして末日がこのように惨めになったのでしょうか。

（五王の台詞）ますますでたらめを言うものだ。お前はこういうことを見て見ろ。世の中には初めに富貴であった者が後に貧賤になった者もある。お前が先に修行し、後に精進落としをしたことはこれと何の差異があろうか。

（台詞）たとえば、今お前が地獄の苦しみに遭ったのは、上帝さまのお考えによるものではく、全くお前独りでやったのだ。

（歌う）お前の夫は天上の極楽浄土にいて、お前の息子は西方の天上にいる。お前一人が地獄に落ち入り、改心して猛省しなければならない。どうして過失をおおいかくし、家の名声をだめにすることが出来ようか。

（劉氏歌う）天上の極楽浄土にいる夫には会えず、地獄で息子に会うことも無理だ。私は修行しても何のためになったのか。業鏡の前で映ってみると悲しい。

（五王の台詞）鬼卒、劉氏を杖刑に処してやろう。（殴り終わる）長い首枷をはめてやろう。

（歌う）すぐ第六殿まで押送してやる。第六殿で公正な法をあきらかにし、できるだけ恩を施し、お前ら母子にしばし心からの話合いをさせてやろう。

（台詞）鬼卒、劉氏を鼎の湯に押送して、衆人に示してやる。

（四王、六王の台詞）止めよう。劉氏はかつて精進や布施を行ったので、彼女に鼎の湯の苦しみを免除してやろう。

（五王の台詞）功は過ちを補うことができるが、過ちは功を補うことはできない。やはり鼎の湯で衆に示してやろう。

（四王、六王の台詞）彼女の夫が善行を積み、息子が孝行をしたために、この刑罰を免除してやろう。

（五王の台詞）皆さまのお勧めのおかげで、彼女の鼎の湯の苦しみは免除してやる。鬼卒、劉氏に長い首枷をはめて、阿鼻地獄に押送して行け。（鬼卒は劉氏を押送して退場する）

（四王、五王、六王の台詞）十殿の閻魔王は私情にとらわれない。金は要らない、人間だけが要る。冥土で金のことを気にするとすれば、貧者は皆亡くなり、富者は生存できるであろう。（一緒に退場）（目連登場）

（目連歌う）急いで閻魔殿の前まで来て、囚人が見え、囚人があたり一面にいる。首枷をかけられ、くさりでつながれて、千鳥足で動いている様子は目に触れると人を悲しませる。

（台詞）お母さん、お母さんよ。

（歌う）まわりをさがしても、私の母は見えない。門外へ行って詳しく聞こう。

（台詞）長官の皆さまにおたずねする。今朝第五殿から一人の劉四真を押送して来たが、もう文章が届いたか。

（舞台内からの台詞）劉四真は今朝殿さまに審問されてから、杖刑四十に処された。もう次の殿に押送された。

（目連の台詞）どうしてさらに次の殿に押送されたのか。ああ、苦しいかな。

（歌う）この話しを聞くと、涙がほろほろ流れる。早くついて行こう。ついて行って、ぐずぐずしてはいけない。見る処では、鉄の城は相連なって、険しい断崖絶壁のようで天にも接するほど高い。罪人がここに来れば、大変苦しめられるであろう。

第三幕　仏は黒いご飯を賜わる。

（張祐大、李純元登場）（張祐大、李純元歌う）我が仏さまの御旨を奉じて、わざわざこの冥土に来た。目連が孝行を行ったために、とくに黒いご飯をもたらした。黒いご飯は彼の母の腹の足になる。前途を指図する。彼の母を救うことは容易だ。

（舞台内の台詞）ああ、苦しい。

（張祐大、李純元の台詞）前の方から目連お兄さんが来た。私たち二人で彼を迎えに行こう。（目連歌いながら登場）

（目連歌う）一心に母のために、苦しみが尽きない。尽きない。冥土をかけまわっている。

（台詞）お二人のお弟さんは何の用でここに来たのか。

（張祐大、李純元歌う）我が仏さまの御旨を奉じてお兄さんに会いに来た、お兄さん。近頃の消息は如何。

（目連歌う）母をさがしても会えない。むだ骨折りをした。骨折り。

（張祐大、李純元歌う）兄さんは安心して心配しなくてもいい。心配。仏さまからご指示がある。お母さんは阿鼻地獄に陥ったが、賜った黒いご飯がある。黒いご飯。お母さんの腹の足しになる。四月八日、この時にお会いできる。この時に。

（目連の台詞）仏さまは、どうして私の母に黒いご飯を賜ったか。

（張祐大、李純元の台詞）仏さまの言付けを伺った。阿鼻地獄には餓鬼が甚だ多い。白いご飯なら、餓鬼たちに奪取られるであろう。黒いご飯は餓鬼たちに鉄の屑だと思われて奪われない。このご飯は法を入れた水で洗われたもので、見ためはよくないが、食べるとおいしい。

（目連歌う）仏さまに感謝する。ご恩は海のように深い。目連は終始心に考えて、高山を仰ぐように。ただちに阿鼻地獄に行って、母を救ってから天上に登って、如来さまに謁見し、お礼を申し上げる。

（張祐大、目連、李純元歌う）兄弟はしばらく東西へ別れていく。今度は順調にお母さんに会えるであろう。人間は不運の極に達すれば幸運がまわってくる。（左右に別れて退場）（班頭登場）

（班頭歌う）阿鼻地獄では、俺は旗頭としてこの牢獄中の餓鬼囚人を管理している。善行を為す人間なら誰がここに来るものか。悪事を働くものは長くここに留まる。

（台詞）おれは阿鼻地獄の旗頭だ。今日は四月八日、我が仏さまのお誕生日だ。大王、獄官、獄吏は皆竜華大会に赴いて、俺に牢獄の門を守るように命じた。囚人たちよ、大王は会に赴いて、まだ帰らない。お前たちはしばらく出て自由に跳

びまわったりしてもいい。

（劉氏登場）（劉氏の台詞）両目は茫然として自分を哀れむだけだ。頭の上に青空のあることもわからなくなった。

（歌う）茫々たる場所、向側さえも見えない。地獄に陥って、千万の苦しみを受けた。空しく顧みて、涙がほろほろ流れてくる。私ははじめに精進落としをして殺生したことを悔いる。婦人として一時の見識の浅薄さのせいで、夫の言うことを聞き入れず、私は神さまから罪を得た。私の息子が再三極力勧告したのに、わたしはどこ吹く風と聞き流した。今つぎつぎの地獄の苦しみを経験し尽くした。往事を追想すると、地団太をふみ、胸をバタバタたたいて、くやしがってもだめだ。ああ、我が仏さまよ哀れんで下さり、彼岸に助けて下さい。我が仏さまよ慈悲を施し、劉四真を許して済度させて下さい。済度。（退場）（班頭も退場）

（目連登場）（目連歌う）弥陀仏さまは仏事の会合に降臨なさる。仏事の会合。母のために哀れみを乞い、彼女の改心をお許し下さるように願う。我が仏さまに謁見すると、衣鉢を賜った。衣鉢。天上の宮殿を離れて冥土に下って母を救い出す。（火が燃え上がる）冥土で火が盛んに燃えているのを見た。火が盛んに燃えている。地獄中のすべての闇を照らして明るくした。鉄の壁が万丈の高さでも、万丈の高さでも、錫の杖を持ち上げて、弥陀を唱え、飛込み姿勢で、まっすぐに急いで来た。さがしにここに来た。ここに来た。阿鼻地獄とはまさにここだ。

（台詞）おや、牢獄の門はなぜ開いているか。そうだ。今日は四月八日、我が仏さまのお誕生日だ。大王、獄官、獄吏は皆竜華大会に赴いたから、牢獄の門が開いている。（獄吏登場）

（歌う）急に牢獄の門が開いているのを見ると、心から嬉しくなる。歩き出し、入って行く。歩き出し、入って行く。

（班頭の台詞）あなたはどこのお坊さんか。妄りに牢獄の門に入って、なんと大胆な者であろう。

（目連歌）長官に申し上げさせて下さい。西方の目連、目連とは拙僧の名前だ。

（班頭の台詞）何の用でここに来たか。

（目連歌う）母をさがすために、わざわざここに来た。

（班頭の台詞）お母さんの名は何と言うか。

（目連歌う）母は劉と言う姓で、四真とは彼女の名前だ。

（班頭の台詞）何の罪で冥土に陥ったか。

（目連歌う）誓いに背いて精進落としをしたので、、冥土に陥った。

（班頭の台詞）劉四真はお母さんか。禅僧さんちょっとお待ち、私はすぐ彼女を呼んでくる。（内に向かって）餓鬼たち、劉四真を呼び出してくれ。

（舞台内の台詞）劉四真、班頭がおまえを呼んでいるよ。

（劉氏の台詞）来たよ。（登場）

（班頭の台詞）劉四真よ。

（歌う）劉四真、良く聞いてくれ。お前には一人の息子がいるね。西方の目連、目連とは彼の法名だ。お前は彼の母親だろう。母親。そうであるか、どうか。そうであるか、どうか。

（劉氏歌う）そのわけを聞くと心の中でうそか本当かと思う。私の息子の名前は羅トだが。

（台詞）ああ。

（歌う）他人の息子なら、どうしてお互いに認められようか。

（台詞）おや、班頭よ、私の息子の苗字は傅と言い、名前は羅トと言うが、まだ世間にいる。そして出家したことはない。ああ。

（歌う）他人なら、認めてもだめだ。

（班頭の台詞）お前の息子ではないか。入っていけ。（劉氏退場）禅僧さん、私は調べた処で、劉四真という人がいる。彼女の息子は苗字が傅、名前が羅トだが、まだ世間にいて、出家したことはないというから、敢えて認められない。

（目連の台詞）おや、苦しいこと。

（歌う）このわけを聞くと、いっそう悲しくなる。いっそう悲しい。詳しいことを申上げよう。目連とは僧となった号で、傅羅トは俗名だった。やはりご案内をお願いする。私母子が会えるように、会えるように。

（班頭の台詞）君の言うように劉四真は本当にお母さんだ。私は禅僧さんの孝行のために、お会いできるように、さらにお母さんを呼び出そう。

（目連の台詞）ありがとう。

（班頭の台詞）（舞台内に向って）劉四真よ、目連は確かに君の息子だ。彼は西方の仏さまに参詣して、本当の悟りを得たので、目連という法名を得た。

（劉氏の台詞、舞台内で）おや、目連は本当に私の息子か。班頭のご案内で母

子が会えるようになって、ありがたい。（登場）

（班頭の台詞）この道から来て。（圓上）（班頭は退場）

（目連の台詞）お母さん、お母さん、苦しいかな。（跪く）

（劉氏の台詞）私の子はどこにいるか。（手探りする）私の子よ、お前はどうしてこれほどの高さか。

（目連の台詞）お母さん、あなたの子はここで跪いている。

（劉氏の台詞）ああ、お前はここで跪いているのね。（さらに手探りする）お前の髪はどうしたの。

（目連の台詞）あなたの子は観音仏さまのお指図で白梅嶺まで行くと、俗の身から解脱して、西方の仏さまに参詣したので、髪の毛を剃ってしまった。

（劉氏の台詞）ああ、私の子は本当の悟りになった。お母さんは目がまっくらで、何も見えない。

（目連の台詞）お母さんの目がまっくらなのか。あなたの子は咒文を唱えて、お母さんの目を明るくして上げよう。

（歌う）仏法は無量で、もとから霊妙な物だ。世の中の億万の人を遍く照す。私が法を入れた水で目を洗って上げれば、年寄りのお母さんは以前通りにはっきり見えるようになる。

（台詞）お母さんよ、お母さんよ。

（劉氏の台詞）私の子よ、私の子よ。

（歌う）今朝、母子は会って、会って、思わず、思わず涙をほろほろと流す。子と別れてから、冥土に陥った。冥土。どれほどの道程を経ったか、苦しかった。地獄の何重かの門を通って、何重かの門。その苦しみは言い尽せない。私の子は世間の人で、世間の人、どういう道を通って母をさがしに冥土に来たのか。

（台詞）ああ、母の宝の子よ。

（目連歌う）お母さんの前で平伏して申し上げる。申し上げる。観音さまにはっきり指図され、お母さんが冥土で、冥土の地獄の中で何度も刑罰を受けたことが分った。このために私は家を捨てて、家、一方に仏教をかつぎ、一方にお母さんをかついで西方へ行きたい。釈迦さまから、ありがたく仏法を授けられ、仏法。お母さんに会うために、地獄にさがしにきた。

（劉氏の台詞）私の子よ、お母さんは腹が空いている。

（目連の台詞）私はご飯を持って来た。お母さんに食べてもらおう。

（劉氏の台詞）母には首枷がはめられていて、どうして食べられようか。

（目連の台詞）お母さん私は咒文を唱えて、お母さんの首枷をはずして上げよう。

（歌う）仏法は無辺で、もとから金剛のようだ。仏法は無量で、その大なることが量れない。今、私が錫の杖をちょっと振れば、首枷は直ちに落ちる。

（餓鬼の衆登場）（餓鬼の衆の台詞）君たちよ、外に一人の西方から来た仏の弟子が法を入れた水で目を洗っている。俺たちは一緒に出て行き、彼に水をもらおう。（一緒に登場）仏さまよ、仏さまよ、目を洗う水をもらいたい。

（目連の台詞）原来牢獄に囚われて、両目が見えなくなった者は多い。私のこの一鉢の法を入れた水でお前たちの目を開けてやろう。

（歌う）仏法は無量でもとから光明なものだ。世の中の億万の人間を遍く照らす。私が法を入れた水で目を洗ってやれば、お前たちは以前のようにはっきり見えるようになろう。

（餓鬼の衆の台詞）よかった。よかった。すべて明るくなった。私は君が見え、君も私が見えるようになった。あそこにご飯がある。一緒に奪い取って食べよう。

（劉氏の台詞）私の子よ、ご飯は餓鬼に奪い取られた。

（目連の台詞）かまわない。あのご飯は私自身の食物だ。仏さまは、お母さんのために別の黒いご飯を賜った。（劉氏の台詞）黒いご飯は食べられるのか。

（目連の台詞）黒いご飯は法を入れた水で洗ったものだから、見た目はよくないが、食べるとおいしい。

（劉氏の台詞）なるほどね。（ご飯を食べる）（班頭登場）

（班頭の台詞）お前たちはどうして皆出て来たか。

（餓鬼の衆の台詞）出て来てちょっと散歩している。

（班頭の台詞）皆入れ。（餓鬼の衆退場）おや、禅僧さんよ、君はなんと法を知らないのだろか。どうして勝手に首枷を、勝手に下してやったか。

（目連の台詞）拙僧は一膳のご飯を母に食べさせたいので、便宜的に首枷を下ろした。班頭はこの過ちをお許し下さるように。

（班頭の台詞）ご飯を持って来てお母さんに食べさせるのはいいことだが、勝手に首枷を下ろしてはいけない。もし、押送の官が来て、見られると、私を連行

するではないか。早く首枷をはめておけ。

（目連の台詞）阿弥陀仏。（鬼卒が押送の官を案内して登場）

（押送の官の台詞）上から遣わされて、皆不自由だ。大王の厳しい命令を奉じて、劉四真を押送するように。鬼卒、班頭を俺の処に呼んで来い。

（鬼卒の台詞）はい、班頭よ。お爺さんが呼んでいる。

（班頭の台詞）旦那が来たぞ。（出て会う）

（押送の官の台詞）鬼卒、この人は誰か。

（鬼卒の台詞）班頭だ。

（押送の官の台詞）おい、班頭か。この悪い奴、お爺さんが来ると、お前は出迎えるはずだ。なんで威張って、自ら「旦那が来たよ」というのか。憎らしい。

（班頭の台詞）お爺さん、あなたからの大書もなく、お知らせの札も来ないから、班頭はどうしてわかろうか。

（押送の官の台詞）知らなかったのなら、許してやる。俺は劉四真を押送するために来た。あの囚人はどこにいるか。

（班頭の台詞）お爺さん、劉四真はそこにいる。

（押送の官の台詞）こいつは法を知らない。お前は俺と話す場合に行儀よくするべきなのに、どうして「劉四真はそこにいる」と指さすのか。この様子で班頭としての資格などあるものか。餓鬼になってもお前にとっては上等だ。おい、鬼卒、班頭は賄賂を受け取って、勝手に首枷を下ろしたから、お前はやつを大王の前にひっぱっていけ。

（班頭の台詞）お爺さん、班頭が勝手に首枷を下ろしたのではない。

（押送の官の台詞）お前でなかったら、誰か。

（班頭の台詞）劉四真の側に立っている者をごらん。

（押送の官の台詞）あれは誰だ。

（班頭の台詞）四真の息子だ。西方から仏法を伝えてやって来た。

（鬼卒の台詞）仏法は何の役に立つか。

（押送の官の台詞）仏法とは冗談ではない。班頭、彼は何のためにここに来たのか。

（班頭の台詞）彼は母に食べさせるご飯を持って来た。勝手に首枷を下ろしたのも彼だ。班頭とは全然関係が無い。

（押送の官の台詞）お前は彼が勝手に首枷を下ろしたのを見た以上、それを元通りにはめてやり、役人に見られないようにすればいいのに。

（班頭の台詞）班頭は元通りに首枷をはめてやろうと思ったが、彼が阿弥陀仏と一言を唱えるなり、私の頭が米のざるのように大きくなった。

（鬼卒の台詞）もし、二回唱えれば、おまえの頭は山のように大きくなるだろう。

（押送の官の台詞）もし、もう一度唱えて三回になれば、おまえの頭は天のように大きくなるであろうか。俺は信じられない。今首枷をはめてやるのを見せてくれ。

（班頭の台詞）信じないなら、すぐはめてやる。

（目連の台詞）阿弥陀仏。

（班頭の台詞）おーい、おーい、おーい.（頭を抱えて逃げる）

（押送の官の台詞）鬼卒、鉄の釘を四つ持って来て、班頭をあの広間の柱に釘で打ちつけてくれ。これは班頭が悪だくみをしたせいだ。鬼卒、お前があの首枷をはめてやれ。もし、お前がはめられたら、俺はやつをひどくやっつけてやる。

（鬼卒の台詞）ごもっともだ。私にはめられたら、班頭よ、班頭よ、あなたはお爺さんとかたをつけるようになる。はめてやる、はめてやる、はめてやる。

（目連の台詞）阿弥陀仏。

（鬼卒の台詞）おーい、おーい、おーい。

（押送の官の台詞）分った。鬼卒は卑しいもので権力が無い。班頭は威勢がない。俺は役人で、大小に拘わらず役人としてのしるしを持っているから、彼をおさえつけることが出来よう。

（鬼卒の台詞）お爺さんは役人のしるしを持っているから、阿弥陀仏を恐れない。

（押送の官の台詞）こっちに来い、しっかり立って首枷をはめさせよ。

（目連の台詞）阿弥陀仏

（押送の官の台詞）大変だ。これはすべて班頭のやったことが私を困らせた。鬼卒、班頭を大王のところにひっぱって行け。

（班頭の台詞）ちょっと待って、ちょっと待って、お爺さんよ、班頭を大王のところに引っ張って行っても、この任務を果たすことができない。やはり相談し

てみる方がいいと思う。

（押送の官の台詞）どのように相談するのか。

（班頭の台詞）目連は出家の人で、慈悲の真の持ち主だから、あなたは丁寧な言葉で彼に勧告すれば、自らあなたに押送されることを承知するであろう。

（押送の官の台詞）おまえから勧めてみろ。彼が承知すれば、おまえを大王のところにひっぱって行きはしない。

（班頭の台詞）私が行く、私が行く。（目連に向かって）禅僧さんよ、この方は押送の官だ。

（目連の台詞）ああ、この方は押送の官だ。

（押送の官の台詞）そうだ、そうだ。

（目連の台詞）押送の官、拙僧は年寄りの母をつれて西方の天上へ帰りたいが、長官に便宜を与えてくれるように願う。

（押送の官の台詞）これは班頭の仕事だ、小官とは関係が無い。

（目連の台詞）班頭に便宜を与えてくれるように願う。

（班頭の台詞）私は便宜を与えたくないでのはない。ただお母さんの生前に立てた誓いによって、十八重の地獄の苦しみを甘んじてうけているのだ。まして十殿の閻魔王は禅僧さんの孝行を知り、重刑を貸すことは無かった。禅僧さんが勝手にお母さんをつれて西方の天上へ戻れば、必ず私たちを困らせることになる。禅僧さんはお母さんを救う孝行の心を持ってはいるが、私たちを救う慈悲を持ってはいない。三思、三思なさる方がいい。

（目連の台詞）拙僧は母をさがすために冥土に来て、第一殿から十殿まで来て、やっと母に会えた。急いで一緒に西方の天上に行きたいのに、どうして別れることを忍べようか。

（劉氏の台詞）目連、私の子、班頭の話しには間違いが無い。私は昔に願をかけ、十八重の地獄の苦しみを甘んじてうける。お前が今私を西方の天上へ連れて行けば、きっと班頭たちを困らせることになる。私の心は忍びない。お前が西方の天上へ戻って、我が仏さまの哀れみを乞うなら、私たち母子は最後に逢う日が来るであろう。

（押送の官、班頭の台詞）すばらしい。立派なお母さんだ。あなたに首枷をはめて上げよう。

（目連の台詞）阿弥陀仏。

（押送の官の台詞）禅僧さんは、どうぞおかえり。

（目連の台詞）お母さん、お母さんよ。

（劉氏、目連歌う）捨てがたい、捨てがたい母子はさらに別れる、別れる。鉄のように強い好漢もこの様子を見れば悲しくなる、悲しい。

（劉氏の台詞）ああ、私の子よ。

（歌う）お前は西方の天上へ戻って、お母さんはさらに前へ行く。はてしがない。いつまた会えるか分らない。

（目連の台詞）ああ、お母さんよ。

（歌う）十か月の妊娠の恩に報いず、報いず、母子は会ったばかりで、さらに別れて行く。

（台詞）ああ、お母さんよ。

（劉氏歌う）今、十か月の妊娠を言わないで、言わないで、三年の授乳の思いを憶えてもらいたい。

（台詞）私の子よ。

（劉氏、目連歌う）まさに涙の流れる目を、涙の流れる目を見る。涙の流れる目。断腸の人は断腸の人を送る。断腸の人。（押送の官、鬼卒は劉氏を押送して退場）（班頭も退場）

（目連の台詞）お母さんよ。（歌う）まさに、まさに断腸の人は断腸の人を送る。

（台詞）ああ、私のお母さんは、苦しいかな。（目連退場）

第四幕　法を受け、灯を賜う

（諸仏は世尊を守護して登場）（世尊歌う）仏座にすわって西方の浄土の境に臨み、晴れ渡った大空に浮き雲も清い。（目連登場）

（目連歌う）道中で矢の如く気があせって、西方浄土の境につくと嬉しくなる。お指図を賜った我が仏さまに感謝申し上げ、阿鼻地獄で母に会った。ご飯を差し上げ、飢えを癒し、法を入れた水で目を洗って上げると、明るくなった。鬼卒に

押送されて、母子はさらに別れた。このために、再び我が仏さまに参詣して救いを乞い申し上げる。

（世尊歌う）人間はすべて天地の間に生きているが、お前のように孝行するのは実に稀だ。お前の母は生前に誓いを立てたので、地獄で苦しめられることが、天上の宮殿で定められたのだ。

（台詞）我はもとからお母さんを済度できるように考えたが、ただ「天は将にこの人に大任を与えるなら、必ず先にその志を苦しめ、その筋骨を苦労させ、その体を飢餓させるという」のだ。お前に地獄を遍歴させてからこそ、大孝にならせることになる。今、お前に与える一つの仏灯は、十八重の地獄を照らすことができる。法恭、仏灯を持ってこい。

（法恭の台詞）はい。（退場してから灯をもって登場する）

（世尊歌う）お前に与える仏灯は、並でない。暗い地獄を照らすと、きらきらと輝く。今度お母さんを救いに行くのは、難しくないと思う。

（目連の台詞）我が仏さまにお伺い申したいが、このような灯はどこにあるのでしょうか。

（世尊の台詞）明州の天堂山、簡州の元光観、成都の成丁山には、皆このような仏灯がある。風に吹かれても消えず、雨に濡っても消えない。この灯を身にかけておけば、十八重の地獄を破ることができる。お前が第十殿の転輪王の処に行けば、すぐお母さんの行方がわかる。息子としての百年の願いが遂げられる。

（目連の台詞）全く仏前の一つの灯をよりどころとする。（世尊と諸仏退場）

（目連歌う）仏灯を身にかけて、仏灯。地獄を照らすと、きらきらとなる。仏灯にたよって、たよって地獄を破り、お母さんを救って早く済度してさしあげる。（鬼の衆登場）餓鬼は万千、万千の餓鬼は互いに擦れあったり、ぶつかったり、つながったりしている。仏灯が現われると、現われると、地獄を破って開ける。お母さんが見つかれば嬉しい。第八殿に来た。第八殿の大王殿さま、母はどこへ生まれかわったかを調べたい。冥土を遍歴して、遍歴しても母が見つからない。涙がほろほろ流れる。いつお母さんを済度して天上へ昇らせることができようか。（獄官登場、鬼の衆は皆逃げて退場）

（獄官の台詞）どこの禅僧さんか。何のためにここに来たか。

（目連の台詞）拙僧は西方の目連だ。母の劉四真をさがしにここに来た。お邪

魔した。

（獄官の台詞）なるほど劉四真はお母さんか。先ほど大王が審判した。杖刑四十を施してから、次の殿へ押送した。

（目連の台詞）おや、失礼する。（向を変えて退場）

（獄官の台詞）おや、おや、罪人の鬼は仏灯に照らされて皆逃げてしまった。これは大したことだ。大王に申上げなければならない。（退場）

第五幕　第十殿の輪廻

（転輪王登場、鬼卒が先導する）（転輪王歌う）冥土では、刑罰と奨励が偏らない。悪人は畜生に生まれかわり、善人は天上に昇る。

（台詞）俺は第十殿の転輪大王だ。今日は一群の悪い罪人が押送されてきた。俺は軽重を区別して、それぞれ生まれ変わらせてやるべきだ。鬼卒、悪い罪人を皆押送してこい。

（鬼卒の台詞）悪い罪人を皆押送してきた。（劉氏、劉假、金奴登場）

（劉假、劉氏、金奴歌う）道中急いでかけまわり、苦しめられても仕方がない。

（転輪王の台詞）劉假、上がって来い。おい、劉、お前は人を騙して、いろいろの悪事を働いた。さらに劉氏に精進落としをさせた。何の罪に当るべきか。

（劉假歌う）大王よ訴えをお許し下さい。劉假は自分の過ちがわかりました。地獄で何回かの拷問を経て来ました。平伏して大王に今回赦免して下さるように乞います。

（転輪王歌）お前の行為によれば、刑法からまぬがれられない。輪廻したいなら、驢馬か馬に生まれかわらなければならない。

（台詞）鬼卒、劉假を驢馬に生まれかわらせるように押送して行け。

（劉假の台詞）大王よ、小人は驢馬になりたくないです。同じ畜生でも虎か麒麟になりたいです。

（転輪王の台詞）よけいなことを言うな。鬼卒、劉假の背中に炭で「劉假変驢」の四つの字をつけてから、精河橋の李仰向の家で雌の驢馬に生まれかわらせてやれる。押送して行け。

（鬼卒は劉假を押送し退場）金奴、上がって来い。おい、金奴、お前はなぜ女主人に犬を殺して肉饅頭を作るように唆したのか。仏教に逆らったことで何の罪に当るべきか。

（金奴歌う）大王よ訴えを許して下さい。金奴が唆したのではなく、実は食べたいだけで、応報を知らなかったのです。どうか大王は私のわずかな過失を赦免して下さい。

（輪転王歌う）お前はそういう考えを起こして、女主人をまきぞえにした。生臭いものが好きだから、猫に生まれかわらせるように押送して行け。（押送して退場）

（台詞）劉四真、上がって来い。おい、劉四真、お前は夫と息子に背き、誓いに背いて精進落としをした。何の罪に当るべきか。

（劉氏歌う）覆水盆に返らず、後悔して涙がほろほろ流れる。大王よ是非私の息子に免じて、この老婆を赦免し、罪を帳消しにして下さい。

（転輪王歌う）罪はあまりに重いから、どうしてて赦免できようか。しばらく輪廻を許して犬に生まれかわるように行け。

（台詞）劉氏、お前の息子目連禅僧の大孝のために、お前を善い処に生まれかわらせてやりたかったが、お前の尸体が焼かれて魂が傷められたから、仕方がない。畜類の体にたよってこそ済度できる。鬼卒、劉氏を犬に生まれかわらせるように連れて行け。

（劉氏の台詞）大王がお許し下さった以上、どうして私を犬になるように罰されるのか。

（転輪王の台詞）お前は安心して行け。お前の息子がお前をさがしに来る時に、自ら済度される。行け。（劉氏退場）

（鬼卒の舞台内の台詞）報告申上げます。（登場）一人の禅僧が大王に会がってる。

（輪転王の台詞）目連が来たに違いない。どうぞ。

（鬼卒の台詞）禅僧さん、どうぞ。（退場）（目連登場）

（目連歌う）ただお母さんを救って、西方の天上につれて行きたい。輪転殿で懇願する。

（輪転王の台詞）禅僧さんは何のご用でここに来られたか。

（目連の台詞）拙僧は西方の目連だ。母の劉四真をさがすためにここに来た。お邪魔致した。

（輪転王の台詞）お母さんのことをすでに軽く処分して、彼女を犬に生まれかわらせた。

（目連の台詞）世の中に生まれかわらせる以上、どうして犬にかわらせたのか。

（輪転王の台詞）禅僧さんは孝行で天地を感動させた。もとよりお母さんを善い処へ生まれかわらせるべきだが、彼女の尸体が焼かれて魂が傷められたので、畜類の肉体にたよってこそ済度できる。母子の会う日は遠くない。禅僧さんは心配しなくてもいい。

（目連の台詞）そうか。失礼致す。（退場）

（転輪王の台詞）一度しくじると永遠に後悔することになる。再び顧みればすでに百年の身になった。（退場）

第六幕　観音さまのご指示

（目連歌う）苦しみが心に染み、どうしてよいかわからない。しようがなく、天に訴えるだけだ。地獄をすべて遍歴したが、お母さんを救うことができない。苦しい、苦しいことには冥土の律は私情にとらわれない。私のお母さんをひどく苦しめた。生まれかわらせたが、生まれかわった場所はどこであろう。おもいめぐらしても思案に尽きる。ただ観世音さまにたよる。悲しく悲鳴をあげる。声をあげて観世音様を呼ぶ。（苦しみの至りで気絶して倒れる）

（観音登場）（観音の台詞）目連弟子，早く目をさまして。

（目連の台詞）我が仏さまが降臨した。弟子は参拝する。ああ、苦しい。

（観音の台詞）目連弟子、母を救うために、孝子としてはいろいろ苦心したが、昇天させるのも世間の難事だ。お母さんはすでに鄭公子の宅で犬に生まれかわった。お前の未婚の妻曹のお嬢さんはいま尼の寺にいる。お前はその寺に行き、彼女をつれて家に帰るべきだ。八月十五日に、孟蘭盆大会が催される時、我と世尊は俗世間に下り、お母さんを済度し、曹のお嬢さんと一緒に昇天させよう。

（目連の台詞）我が仏さまのご指示に感謝を申す。

（観音歌う）お母さんは今すでに生まれかわり、猟犬になって清渓で猟をしている。お前は今すぐそこへさがしに行って、初志を遂げる。それから尼の寺に行って、妻を連れて帰る。一家団らんはこの時だ。

（目連歌う）我が仏さまのご恩徳に感謝を申す。弟子は心に刻み込み、平伏して最敬礼を申す。お母さんが苦しめられているのを思えば涙が流れる。ただ精進落としした一つの過ちのために、前の事を持ち出すには、持ち出すには堪えない。

（観音の台詞）母子の団らんはもう遠くない。